

《第 471 回（2020年2月6日）子どもの本の読書会記録》 参加者：7人 文書参加：1人

時間：10:00～11:30 場所：オーテピア 4 階集会室

『ソングジュの見た星 路上で生きぬいた少年』 リ・ソングジュ、スーザン・マクレランド／著 野沢 佳織／訳 徳間書店

今月の読書会の課題本は、国家が危機的状況に陥った 1990 年代半ばの北朝鮮で、コッチェビ（浮浪孤児）として生きぬいた少年・ソングジュ（著者）が主人公のノンフィクションです。

ソングジュは、父のような職業軍人になることを夢見る男の子。首都平壤で何不自由ない生活を送っていましたが、1997年1月、突然の父の「休暇」によって、平壤から遠く離れた鏡城郡へ移り住むこととなります。しかしそこでは、当時起こった食糧危機や配給制度の崩壊によって、深刻な飢餓や貧困が市民を襲っていました。耐えかねた父は、食料を買い付けるために中国に行くのと家を離れたきり行方不明に。さらに母も、叔母の家へ出かけてからの消息が分からなくなってしまいます。一人残されたソングジュは、同年代の子どもたちと次第に「兄弟」の強い絆を結び、市場で盗みをしながら、飢えと暴力が蔓延する社会を生きぬいていきます。

作品では、著者が 16 歳で脱北するまでの数年間にわたる壮絶な体験が描かれています。隣国北朝鮮で、十数年前に起こった現実をテーマにしたこの本は、読書会に参加した私たちに大きな衝撃を与えました。以下は、読書会参加者の感想です。

●北朝鮮を題材とした作品を読むのは初めて。ソングジュは、自分の長男と同年代。自分の人生と並行して、こんな生活があったのかと衝撃だった。母親が出て行った後の飢餓の苦しみには言葉がない。「兄弟」たちは、仲間の祖母を弔うなど、根には優しい心を持っている。子どもの頃に大人たちから聞かされた神話や昔話が会話の所々にでてきて、それがソングジュの根っこにあると思うと、慰めになる。

●『わたしたちが孤児だったころ』（カズオイシグロ）を思い出した。個人が、生まれてきた場所や時代によって、政治のシステムに翻弄されてしまう。そのシステムがどんなにひどくても、友情や感性は失えない。とにかく生きぬかないといけない世界の中での、「兄弟」同士の助け合いが印象的。著者は、子どもの頃の記憶を、こんなに鮮明にどこに保存していたんだろう。

●大人の目線で書かれている脱北記は読んだことがあったが、子ども目線のもの珍しい。父が粛清されずに生き延びられたから、ソングジュも今生きていられる。「兄弟」たちは、ソングジュが必ず生き延びて、その先を探してくれることに期待をしていたと思う。ソングジュが皆にとっての星だったのでは？彼らが何も追求せずにソングジュを見送る最後のシーンが印象的だった。全員無事であってほしい。

●隣国がどこかなんて考えたことがなかった。関心が無かったことを読み始めて思った。物語として語られると、ニュースを聞くのとは違った感覚で悲惨さが入ってくる。自分の国が最高！と思えるのは幸せだけど、怖い。今まで幸せに育ってきた世界が、ひっくり返るのが悲惨で、最初のシーンが怖かった。生き延びるには運のようなものがあって、生きる努力をしても、何に左右されるか分からない。

●北朝鮮に関してすぐに思いつくのは、拉致問題。過去に日本が朝鮮を占領していた話も出てきて、日本に無関係な話ではないと思った。家族が、国によって引き裂かれてしまう。昔のことかと思ったら、20年くらい前の話で、そんな現実があったのかと驚いた。経験を本に書くこと自体が、とても危険で勇気がいること。他人事と思っただけではないが、自分に何ができるか？

●ここまで壮絶なものだったのか、人間はここまで無慈悲になれるのかと、二重の衝撃があった。北朝鮮のことは、閉ざされた国で理解出来ない国と考えていたし、近年 Jアラートが鳴るといふ事態があつてからは、怖い国で理解不可能、と思考停止になっていた。悲惨なことが起こっていたのに全く注意を向けなかった。ソングジュの姿に胸をギリギリさせながら読んだ。今年度読んだ本の中で一番凄いな本だった。

次回 4月9日（木）10:00～11:30（予定） オーテピア 4 階集会室

□『動物会議』ケストナー/作、高橋 健二/訳 岩波書店

3月の読書会は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、休会です

📖絵本版『動物会議』（池田 香代子/訳 岩波書店）も合わせて読んでいただくことをおすすめします